

戦間期関西学院における「恒久平和」運動について（前）

―神崎驥一、[#]乾精末と国際連盟協会、排日移民法、太平洋問題調査会、軍事教練―

井上 琢智

目次

I はじめに

一 日清・日露戦争時の「反開戦」・「反戦」・「非戦」思想

二 キリスト者の「反開戦」・「反戦」・「非戦」思想

(一) 内村鑑三（二八六一～一九三〇）

(二) 新渡戸稲造（一八六二～一九三三）

(三) 浮田和民（二八五九～一九四六）

(四) 賀川豊彦（二八八八～一九六〇）

II 関西学院戦間期前の平和運動（以上、本誌掲載）

III 関西学院戦間期における平和運動

一 国際連盟と国際連盟協会

- 二 排日移民法
- 三 太平洋問題調査会
- 四 軍事教練反対運動
- IV おわりに

I はじめに

一 日清・日露戦争時の「反開戦」・「反戦」・「非戦」思想

明治以降、欧米諸国を模範国とし近代化を推し進めてきた「後進国」日本は、日清戦争（一八九四～九五）、日露戦争（一九〇四～〇五）で二大国に勝利し、第一次世界大戦（一九一四～一八）では、日英同盟を理由にドイツに宣戦布告して勝利した。これによって、日本はアメリカの同盟国となり、世界の五大強国の仲間入りをはたしたとの意識が日本国民に広がった。とはいえ、これらの戦争を通じて植民地や賠償金を獲得し、戦時外債⁽²⁾を發行し、それらを利用した「上からの産業革命」を実現することで「一等国」となった日本にも、「反開戦」・「反戦」・「非戦」思想や平和運動がなかったわけではない。

日清戦争について、勝海舟はその著『氷川清話』で「日清戦争はおれは大反対だったよ。なぜかつて、兄弟喧嘩だもの犬も喰はないぢやないか。たとへ日本が勝つても、ドーなる。支那はやはりスフィンクスとして外国の奴らが分らぬに限る。支那の実力が分つたら最後、欧米はやはりドシ／＼押し掛けてくる。つまり欧米人が分らないうちに、日本は支那と組んで商業

なり工業なり鉄道なりをやるに限るよ。一体支那五億人の民衆は日本にとつて最大の顧客サ³と語り、反開戦の見解を示した。

さらに、日露戦争時の『萬朝報』は、「反露感情を諫める」内村鑑三の「露国と日本」（一九〇三年八月一七日）や「平和の実益」（九月一日）を掲載し、「非開戦論」を主張した幸徳秋水の「二者一を取れ」（八月二三日）を掲載したが、他方、社説「積極的、進取的取れ」（八月二二日）で「実力を以て之に加ふるの用意」せよと、開戦論をも唱えた。それにもかかわらず、その翌日八月一三日になると幸徳の「非開戦」論である「好戦心の挑発」を掲載し、九月二六日には内村の「非開戦論の集約である」「近時雑感（二三）」を載せる一方、同頁に「独力の覚悟」を掲載するなど、「強硬論と非開戦論」を併存させるという「社論の分裂」を露呈した。さらに、九月三〇日には、再び内村の「近時雑感（五）」と、幸徳の「非立憲的外交」という「非開戦」論を掲載するなど「これはもはや社論とは言えな⁴」い状況に陥っていた。

しかし、「非開戦」・「開戦」論の両論を掲載していたこの『萬朝報』も、第三次撤兵期限である一九〇三年一〇月八日になって社説「最終の期日」を発表し、社論が「開戦」で固まるなか、九日には、社長黒岩周六（涙香）は「開戦論に社の立場」を決定的に固めた。そのために、一二日に内村は「退社に際して涙香兄に贈りし覚書」を書き、幸徳と堺利彦とは連名で「退社の辞」を残し退社した。⁵ その「要旨は『国際間の戦争は、貴族、軍人の私闘であつて、国民の多数は其為に犠牲に供せらるゝ者』⁶であつた。

このような非開戦論から開戦論へと「転向」したのは『萬朝報』だけでなく、秋山定輔の『二六新報』、福沢諭吉の『時事新報』、政府系で当初「平民主義」を唱えた徳富蘇峰の『国民新聞』、

『東京日日新聞』はもとより、「非開戦論を唱えていた」『毎日新聞』ですら一〇月二二日「国民最後の覚悟」において「吾等が戦争を疾むこと他の平和論者の後へに在らず、然れども条
理国利是れ立国の要件なり」と開戦論へ傾き、ここにマスコミにおける「開戦論は完成した」⁽⁷⁾。

二 キリスト者の「反開戦」・「反戦」・「非戦」思想⁽⁸⁾

(一) 内村鑑三(一八六一—一九三〇)

「反開戦」・「反戦」・「非戦」思想の具体的事例を関西学院に深いかかわりのあるキリスト者⁽⁹⁾のうち、最初の人として内村鑑三⁽¹⁰⁾を挙げよう。

札幌農学校二期生でアメリカ・メソヂスト監督教会のM・C・ハリスから受洗したが、そのメソヂスト教会から独立した自らの教会(札幌監督教会(札幌独立基督教会))を持つことを目指した札幌バンドに属していた内村は、日清戦争時には「この戦争が弱い朝鮮を守るための『義のための戦争』であり、日本国の『欲の戦争』ではない」との立場をとっていた(“Justification for the Korean War.” *Japan Weekly Mail*, Aug. 1894)。)の主張⁽¹¹⁾は、「一八九五年四月の講和条約の講和会議直後には、すでに自らの義戦論が誤りであったことを認め」たものの、彼が「絶対的な非戦論」に転ずる第一歩を踏み出したのは、一九〇三年からであった(四八)。それを最初に表明したのは「戦争廃止論」(『萬朝報』六月三〇日)であった。これは、通説的見解によれば、水戸寛人・金井延ら東京帝国大学教授による日露戦争開戦論建議書の公表(「七博士事件」)に対する批判であった。

その主張は「余は日露戦争非開戦論者である許り⁽¹²⁾でない、戦争絶対的廃止論者⁽¹³⁾である。戦

争は人を殺すことである、さうして人を殺すことは大罪悪である、さうして大罪悪を犯して個人も国家も永久に利益を納め得やう筈はない」（四九）と主張したが、そこには「キリスト教的ヒューマニズムを認めることはできるが、聖書の終末論的信仰がまだ根底に置かれているわけではない」（五〇）。このように未だ「絶対的非戦論」に徹底できなかったがゆえに、前述のような「非開戦論」の諸論文を公表したのである。

しかし、一九一四年七月に勃発した第一次世界大戦という「世界未曾有の大戦争」（内村の言葉）との対峙の中から生まれた「絶対的非戦論」は、「決して政治的・状況論的な『反戦』論」でも、「人類愛やヒューマニズムといった普遍的な考え方から生じたのではなく、「彼の聖書研究と信仰の全体に深く係わって」おり、「一九一八（大正七年）頃から具体的に文章化され明確化される、イエス・キリストの再臨信仰、キリスト教の終末論思想と分かちがたく結びつけられている」（四八～四九）ものとなった。

この「絶対的非戦主義」への道は、まず『聖書之研究』（一九〇三年九月一七日）でヤコブ書やイザヤ書を引用して「悪しき手段を以て善き目的に達することは出来ませぬ、…平和は決して否決して戦争を透スりて来りませぬ、平和は戦争を廃して来りませぬ、武器を擱おくこと、是が平和の始りであります」と指摘したものの、富岡によれば「ここには、キリスト教的ヒューマニズム「富岡はそのルーツをカントの『永遠平和のために』に求めている」を認めることはできるが、聖書の終末論的信仰がまだ根底におかれているわけではない」（五〇）。それゆえこの「キリスト教的ヒューマニズムという『近代』主義の、その『旧き世界を去りて』…キリスト再臨の約束を信じる『新しき世界』の思想によって、改めて構想」

(五七)しなすことに迫られた。その結果、一九一七年七月の「戦争廃止に関する聖書の明示」(『聖書の研究』)で、人や輿論によってではなく「戦争は神の大能の実現に由て止むのである。戦争廃止は神が御自身の御手に保留し給ふ事業である。是は神の定め給ひし世の裁判官なるキリストの再臨を以て実現さるべき事である」として、その根拠をイザヤ書二章以下、ミカ書四章三節以下に求めた(六一)。

内村の「絶対的非戦論主義」は、このように第一次世界大戦という人類史の大転換期を「たんなる時代状況としてではなく歴史の根源的な動向ととらえようとしたからこそ、聖書の終末論まで立ち返ることをなした」(六三)からこそ生まれたものであった。⁽¹²⁾

内村は、一九一八年一月より約一年半この「再臨運動」を展開したものの、「極端な理想主義ではないか」、「現実政治や国際関係のあり方を無視した発言」と批判され、教会からも反撥を受け中断したが、「その信仰を棄てたからでは」なかった(六一―六三)。

(二) 新渡戸稲造(一八六二―一九三三)

札幌農学校の第二期生として内村と同期であり、M・C・ハリスから受洗した新渡戸は、内村らとの共同生活によって札幌監督教会設立資金調達に協力しながらも(三九)、⁽¹³⁾「宗教的懐疑に悩まされて……ふさぎこみがちな心理傾向」にあつたが、「儀式もなく主宰する教職もないフレンド「クエーカー」派の簡素な礼拝様式」や「神は万人の心に在る。各人は内なる光をもつていて、静黙と誠実な確信を通してそれに接することができる」というクエーカーの思想」は、彼の求める「宗教心にびったり叶った」ものであつた。

新渡戸は、「宗教的懐疑に悩まされていた」学生時代にカーライルの *Sartor Resartus* (1836) 『衣装哲学』でクエーカーを知り、さらにフィラデルフィアを訪ねた留学中の新渡戸は、アーマスト大学入学前にフィラデルフィア近郊の知恵遅れの施設で働き、熱心なクエーカー教徒モリス夫人と既知となっていた内村から、そのモリス夫人やその地のクエーカー教徒を紹介されたことで、クエーカーに急接近し、留学先のジョン・ホプキンス大学に戻った後もその地のクエーカー集団で活動した。というのは、新渡戸はクエーカー主義に「王陽明学のような東洋哲学」と同様「神は普遍的であって、一つの伝統に縛られる必要はない」とする思想を読み取り、「一八八六年十二月、新渡戸はクエーカー信仰」に回心した。それによって「欧米の付加物を取り去った純の純なるキリスト教こそ」彼の抱いていた「国民性と教派と」の「：・宥和」(五四)が可能となるだけでなく、そのクエーカーのもつ「社会改革の實行」⁽⁵⁾が彼の社会改革の源となった。

これは、新渡戸が佐藤一斎の『言志後録』のなかで指摘された「縦の関係と横の関係」について、前者は“Alone with God and me.”⁽⁵⁾であり、それから生まれる「強さ」「勇氣」に支えられながらも、後者つまり「世の人と交わるときは：・和を以てする、ソシアリテイ」(二二二―二三)こそが、「平和主義」に必要な「horizontal-verticalの関係である」(二六五)と考えた。それこそが「縦」を重視する内村が「信仰の人」であったのに対して、「横」を重視する新渡戸が「行いの人」(六五)とされる所以であり、「内なる光」(二五五)を信じたクエーカー新渡戸はそれゆえ「青年にキリスト教を説く仕事」を「盟友内村鑑三それを委ねた」(三九二)のである。もっとも新渡戸は内村を「恐ろしいドグマティック：・で寛容

の精神が少しも現はれぬ」と表し、内村は新渡戸の講演は「資料豊富で人を魅了する力があつた」が「……しめくりが無かつた」(二五四)と評した。

このような信仰をもつ新渡戸の平和観を一九三〇年六月二四日、国際連盟関西学院支部の招聘で行つた講演「愛国心と国際心」⁽¹⁷⁾を中心に明らかにしよう。

「今日までキリスト教信者は平和と云ふ事を余り考えなかつたようである」との認識に立つ新渡戸は、「幾多の人を殺した」コンスタンティヌス⁽¹⁸⁾がキリスト教を許したことで彼を聖者としたが、それにより、「キリスト教は腐敗した」(七八)と指摘する。つまり、クエーカー教徒新渡戸にとつて、好戦的なコンスタンティヌスによるキリスト教の国教化こそが、キリスト教とりわけカトリックが腐敗した原因であつた。まさに「キリスト教には、平和の教えがありながら……用ひられず、……戦争があつた」。その平和は「理想」にすぎず、「實際を離れたものあり」、「平和は結構だが、その為に生活が楽になると、神を離れ」てしまふと新渡戸は考えた。その「戦争」という現実を「平和」という「理想」に導くことこそ、「国際協力」「国際協調」⁽¹⁹⁾であり、それを担うのが「国際連盟」だといふ。この「国際協力」「国際協調」に導くのが「国と国との間を円満にする心」である「国際心」であり、それは「和解的」(二二二)な「愛国」[nationalism]「心」を含む真の「愛国心」の延長であり、それこそが「敬する事」のできる御誓文中の「天地の公道」(八〇)だと指摘する。まさに「超国家」でもなく、「絶対的平和主義でもなく、また普遍的強制加入組織でもない」⁽²⁰⁾「国際連盟の会議場こそが、「平和と安寧秩序の維持のため」になすべき「協調」の場であり、その目的実現のために「すすんで加入した」⁽²¹⁾日本も含め「何故世界は、もつと之を利用しないのか」(八一)

と、関西学院での講演が行われた一九三〇年段階では新渡戸は警告した。

「人類はその究極の目的に於て一である。吾等の努力は一致 Unity に向はしめるべきである。一致がなければ恒久平和、幸福、繁栄を享けることが出来ない。仮令我等今尚此目標を去ること遠いと雖も、時代の兆候は我等の理想も誤らない事を示す」⁽²²⁾。このような国際連盟における世界の「恒久平和」実現のため、「横の関係」すなわち「国際協調」を「行いの人」として実践し、その実践を支えたのがクエーカー信徒としての「縦の関係」に支えられた「信仰」であった。その信仰に従って、新渡戸は「平和主義者として、軍国主義や狂信的民族主義『愛国屋』」（八〇）、武断的帝国主義や経済的・文化的帝国主義を批判し、国内的には自由主義者として社会主義には至らなかった」（二六四）。

(三) 浮田和民（一八五九～一九四六）

熊本バンドの一人として洗礼を受け、同志社で学んだ浮田和民は、一九〇九年二月から一九一九年六月まで『太陽』⁽²³⁾の主幹となり、日清・日露戦争後の日本の「帝国主義」時代に「活発な学問的・思想的活躍を展開」し、『帝国主義と教育』（一九〇二）、『帝国主義の理想』（一九〇三）等を公刊し、「大正デモクラシーの先駆者と評価される一方で、徳富蘇峰と並ぶ『帝国主義』擁護者の一人として批判にさらされるといふ、きわめてアンビバレントな思想家として位置づけられることとなった」⁽²⁴⁾。

浮田は、一九〇四年の日露戦争開戦後七ヶ月をへた九月一八日、東京教育会で「日露戦争と教育」と題する講演⁽²⁵⁾を行った。その中で、日露戦争について三つの「発明」があったと言ふ。

一つは、わが国が今日あるのは「忠君愛国」ばかりでなく「開国進取の精神」があったからであること、もう一つは、この度の戦争は国の「安危」にかかわる大戦争ではあるが、今日のような挙国一致の主戦論では困ること、つまり、「一方に主戦論があれば、一方に平和論」がなければならぬ、主戦論だけでは「一本足で立つが如く危険の上」ないのでありまして、平和論者の批判が必要であると主張した。ここに、「どのような場合にも反対論の必要を認める」という「反骨の言論人」浮田の「自由主義の表れ」⁽²⁶⁾を見て取れる。⁽²⁷⁾最後に賀川豊彦を採り上げよう。

(四) 賀川豊彦（一八八八～一九六〇）

賀川は、一九〇二年『聖書』を読み始めてから平和思想を抱くようになり、南長老ミッション宣教師H・W・マイアースが建て（一八九九）、彼が通っていた徳島教会で一九〇四年に受洗した。日清戦争中の一九〇五年にトルストイの『我宗教』『我懺悔』が邦訳され、その反戦思想に影響を受け、またこの頃、安部磯雄や木下尚江の著作を読み、キリスト教社会主義にも共感を覚え、徳島中学校時代には軍事教練サボタージュ事件を起こした。

一九〇六年に徳島中学校を卒業した賀川は、明治学院神学部に進学し、その夏、彼は「世界平和論」をつづつて、『徳島毎日新聞』に投稿し、三回にわけて掲載した。それは「カントの『永遠平和のために』*Zum ewigen Frieden*（一七九五）を引用し、マルクスの主張、カーライル、ラスキン、トルストイなどの言葉をかりて人道の本義を語り、無抵抗主義を説き、帝国主義から社会主義への道を論じ、遠く世界の平和にまで論及したものであった。賀川に

（28）おいては、平和はキリスト教信仰と併存するものでなく、キリスト教信仰即平和であった」。

一九二一年に、賀川は「イエスの友会」を創立し、五綱領を定めその中に「世界平和のため努力すること」の一項目を加え、一九二五年のヨーロッパを旅行中のロンドンでタゴール、ガンジー、アインシュタイン、ロマン・ローランらと名を列ねて、徴兵制度反対の宣言書を国際連盟に提出したため、軍部は彼の言動を監視しはじめた。

第二次開戦前、小説『約束の聖地』（一九三八）のなかの「宇宙の真理を求めようとするような人間の行動は、露ほども見られなかった。勿論人類を相愛互助の世界に導かうとする真剣な態度は露ほども発見することは出来なかった」との文言削除が命ぜられた。一九四〇年八月には反戦論の疑いで憲兵隊に拘引され一八日間留置されたし、一九二二年以来出版されてきた雑誌『雲の柱』（月刊誌）は発行停止処分を受けた。その終刊号の巻頭の「エレミヤ哀歌に学ぶ」の終りの部分で、「口を塵につけよ、エレミヤ哀歌にこの真理をうたった詩人の気持を理解しなければならぬ。そうすれば神は永久に民をすて給わぬということが自らわかってくるのである。世界の理想は神中心の神の国の組織である。そこにはいささかも悪の支配もなく、たゞ愛と謙遜と知識と芸術とが支配するのみで、即ち正しき者が勝利を得る世界である。この究極の真理を忘れてはならない。これを忘れる者が負け、これを忘れない者が勝つのである。世界を救う真理のためには徹底的には徹底的にはずかしめを受けることも時には忍ばなければならぬ。世の救いのためには癩者ライの膿をすう覚悟がある。即ち、口を塵につけよ、あるいは望みあらん。おのれを打つ者に頬をむけ、充ちたれるまでにはずかしめをう

けよである」⁽²⁹⁾と書いたため、終刊号は発売禁止となり、雑誌は没収された。

一九四一年四月の渡米での三百回をこえる講演で、日米両国間の平和を説き、戦争をさけるために努力し、帰国後の九月五日、近衛首相と約三時間日米平和工作について懇談し、「首相がルーズベルト大統領と会談したい」との電報をスタンレー・ジョーンズと大統領に賀川が打電した。スタンレー・ジョーンズからの返信には、「ここ一週間があぶない。ワシントンで徹夜の祈祷会を開くから、東京でも開け」というのであった。賀川は同志たちと連日連夜不眠の祈祷会をひらいたが一週間後、真珠湾攻撃の報が、ラジオから流れた。

一九四一年五月二七日、神戸市における伝道集会の講演が反戦思想、社会主義思想の疑いで神戸相生橋警察署で一晩監禁され、また一月三日から九日間、反戦的行為があったとして東京憲兵隊本部の取調べをうけ、ついに友和会の解散、国際戦争反対者同盟からの脱退を強要され、その後の宗教運動も制限をうけるようになった。

しかし、一九四三年一月一〇日になると賀川は「天空と黒土を縫い合わせて」という一文を公表し、日本の戦争行為を正当化し、「転向」⁽³⁰⁾した。このように、賀川は、相対的平和主義者であって、「クエーカーやメノナイトのような」平和論者でも、内村のような「絶対的・道徳的」平和主義者ではなかった」(二〇九)。

II 関西学院戦間期前の平和運動

明治以降、天皇制国家に「近代性」を付与する道具立ての一つとして大日本帝国憲法が發布さ

れ、改正徴兵令による国民皆兵制や官立・府県立学校のみ限定されていた「御真影」の高等学校へ下賜された一八八九年九月に関西学院はキリスト教主義学校として南メソヂスト教会日本宣教師総理W・R・ランバスによって創立された。

第二次世界大戦前の関西学院の歩みは、日本の教育制度の枠内で、そのキリスト教主義教育を維持し、反戦運動・平和運動に参加しながらも、私学経営を維持・発展させるために、種々の工夫と努力を重ねた。

「学院は時に起つて国際正義の樹立の為に戦ふ事もあるも、それは衷心より世界の恒久平和を希ふが為に他ならぬ。平時は常に国際精神の涵養、国際提携の増進の為に尽力する所尠からぬものがある」⁽³¹⁾との趣旨から、一九〇六年秋には、来日中のアメリカ民主党首領で平和主義者であったW・J・ブライアン⁽³²⁾を招聘し、学生だけでなく神戸市民に講演を公開した。関西学院は学生も含めて、このように平和運動に参加するとともに、他方では、キリスト教主義教育の維持しながらも学生確保のために、一九〇九年には認定・指定を受け、⁽³³⁾一九一五年には普通学部を中学校令に準拠する中学部と改組せざるを得なくなっていた。⁽³⁴⁾

【注】

本稿は関西学院第五代院長神崎驥一の伝記執筆の資料としての役割をも果たそうするものである。

(1) その「近代化」を促進したイギリス留學生の派遣、お雇い外国人の雇用、経済思想の導入を軸とした実態については、井上琢智『黎明期日本の経済思想―イギリス留學生・お雇い外国人・経済学の制度化―』（日本評論社、二〇〇六）を参照のこと。

(2) 日清・日露戦争遂行に必要な戦費調達のため、イギリスを軸としたアメリカ、フランスでの外債発行、その発行の障害となった人種差別「黄禍論」克服の過程については、井上琢智「添田寿一と日清・日露戦争—*Economic Journal* 宛公開書簡等に見る外債募集と黄禍論—」（『甲南会計研究—庭本佳和先生退職記念号—』No.九、二〇一五年三月、一〜一七頁）を参照のこと。

(3) 『氷川清話』、講談社学術文庫、二〇〇〇、二六九頁。勝のこのような主張の背後には、「維新前から日清韓合従がしよの策」（同頁）の主張があったからである。問題なのは、その「合従」の形態であろう。ただ、この勝の指摘のように、日清戦争後中国の「割譲」がドイツ（膠州湾）、イギリス（威海衛）、ロシア（旅順・大連）、フランス（広州湾）によって「租借地」の形で行われ、日本は賠償金に加えて、遼東半島・台湾・澎湖諸島を割譲させたが、三国干渉により清に代償金を支払わせ遼東半島を返還した。なお、「最初に『氷川清話』を編集した吉本襄が：勝手に書き換えた」ものが流布したが、講談社版勝海舟全集二一『氷川清話』では、その「改竄」が修正された。この引用箇所は、流布本が「忌避」した箇所であり（三〜四頁）、全集版をもとに刊行された江藤淳・松浦玲編『氷川清話』に収録されたものである。

(4) 片山慶隆「日本のマス・メディアによる対露開戦論の形成」（『一橋法学』、第七卷第一号、七九頁）。なお、片山には、幸徳秋水、内村鑑三、『週刊平民新聞』に代表される非開戦論を扱った「日英同盟と日本社会の反応一九〇二—一九〇四—言論界の動向を中心として」（『一橋法学』第二巻第二号、二〇〇三）がある。また、同氏の『日露戦争と新聞—「世界の中の日本」をどう論じたか—』（講談社、講談社選書メチエ、二〇〇九）も参照のこと。

(5) 片山前掲論文、八一頁。

(6) 西田長寿「平民新聞とその時代—非戦論を中心として」（『文学』二一（一〇）、九七三〜八二頁。一九五三年一〇月）を参照のこと。この間の事情を西田は「同日「一〇月八日」夜、社会主義協会は非戦論大演説会を催したが、席上幸徳、堺は萬朝報社退社することを決定し、一〇日、黒岩もその

旨を諒として之を承諾した。内村もこの際退社した」と書いている。幸徳と堺は、退社後も非戦の主張を続ける場を求めて平民新聞社を一月一日結成し、一九〇五年一月二十九日まで、引き続き非戦論と社会主義を唱道した。「之に反し、内村は、『日露戦争に同意することを以て日本の滅亡に同意すること、確信』するが、国民挙て開戦を決する上は沈黙せざるを得ない。『当分の間論壇より退くことに決心』した」として、西田は「両者「幸徳・堺と内村」の差はきわめた明白」として言論人・内村を批判した（九七四頁）。しかし、西田によるこの批判は適切ではないであろう（富岡幸一郎『非戦論』二〇〇四、NTT出版、四八〜四九頁）。というのは、後述のように、この「沈黙」こそ「非開戦」・「反戦」論から「絶対的非戦論」への転換を促したからである。引用文中の傍点は井上ものである）。

(8) この内村理解にもとづいた現代の「戦争論」に対する有益なコメントに言及した岡山英雄・富岡幸一郎との対談集『キリスト者の戦争論』（地引網新書、二〇〇六）は、時代を越えて、今なお有益である。両者の相違は、富岡が内村の「非戦」論と「終末」論を統合するポイントを「パレスチナ問題」に見ているのに対して、岡山は「聖霊」論の方がより重要だと考えている点である（七二頁）。

(7) 片山前掲論文、八二頁。これらの諸相についても片山前掲論文および著書を参照のこと。

(8) 「反戦」・「非戦」という用語に加えて、菊川忠雄『学生社会運動史』（一九四七）の附録「学生社会運動年表」によれば、「排戦」という用語が出てくる。それは、一九二四年九月二一日「国際排戦デー」学連「学生社会科学連合会」参加である。この年、関西学院社会科学研究会は誕生している。この学連は、この年九月一日、旧名「学生連合会」が改称されたものである（『近代日本総合年表』第三版、岩波書店、一九九一、二六一頁）。

(9) 内村は関西学院にしばしば来学・講演し、生徒・学生に大きな影響を与えた。また、彼の末弟である順也は、開成学校中途退学後、鑑三の薦めて関西学院普通学部に一八九七年に入学し、アメリカ留学後、一九二一年から三九年まで関西学院中学部英語教員となった（詳細は、井上琢智「内村順

也」〔関西学院の人物と二〕〔関西学院大学史紀要〕七号、二〇〇一、二二二―一九頁〕を参照のこと。新渡戸稲造は、日本国際連盟協会関西学院支部での講演のために二度わたり来学し、関西学院の平和運動に大きな影響を与えた。また、賀川豊彦は、関西学院と青山学院との共同編集誌『神学研究』に投稿したり、戦前・戦後を通じて関西学院でしばしば講話し、生徒・学生に大きな影響を与え、本学の受洗者の増加に寄与したし、一九五五年から五八年まで、学院理事を務めたり、農学部設置を提案したり、本学の分校として小豆島農芸学園の設置に貢献した（『関西学院事典 増補改訂版』二〇一四、四八頁）。

(10) 本項の記述は、富岡幸一郎前掲書による。なお、本文中の漢数字は同書の頁数である。

(11) この「戦争絶対的廃止論」の「戦争廃止」と前述の「国際排戦デー」の「排戦」との関係については、さらなる考察が必要であろう。なお、「国際排戦デー」は国際連盟およびアムステルダム・インターナショナルが主導した運動であった（菊川前掲書、二七一頁）。

(12) 内村が再臨信仰に至った契機として、①第一次大戦の衝撃とくにアメリカの参戦、②愛娘ツル子の死（一九二二）、③友人D・C・ベルから送られた「キリストの再臨は果たして実際問題ならざる乎」（一九二六）に加えて、富岡は④ニーチェ耽読による内在的な西洋キリスト教社会への批判、⑤パレスチナの地でのユダヤ民族の国家建設（大イスマエルには反対）を認めた「バルホフォア宣言」（一九一七）を追加している（六七―六八、八三）。

(13) 佐藤全弘「新渡戸稲造―生涯と思想―」キリスト教図書出版、一九八〇、三九頁。以下、新渡戸についての記述は本書による。なお、新渡戸は札幌農学校教授時代には独立教会の夏期講座開催を自ら提案し、「教会史」を七回連続講義をしている（三九四頁）。なお、本文中の引用にある数字は本書の頁数を示している。

(14) J・M・オオシロ、佐藤全弘訳「新渡戸稲造とフィラデルフィアのクエーカーたち」（『新渡戸稲造全集』第二〇巻、教文館、一九八五、二二―一四頁）。佐藤によれば「クエーカーの信仰が、神学

的教義論を好まず、内的靈交を尊び、確信は口で表すより、平和と憐れみの行為で表すという実行主義でありました」（佐藤金弘前掲書、二二六〇頁）。

(15) J・M・オオシロ前掲論文、二二四頁。

(16) この信仰と社会における「縦と横」との関係について、『ブッダのことは―スッタニパーター』（中村元訳、岩波文庫、一九八四〔二〇一六〕）もまた、「慈しみと平静とあわれみと解脱げだつと喜びを時に応じて修め、世間のすべてに背くことなく、犀の角のようにただ独り歩め」と述べ、信仰における孤独の重要性だけでなく、社会性の重要性をも説いている（二二、七三頁）。

(17) 国際連盟協会関西学院学生支部『恒平』第四号、一九三二、七六―八一頁。なお、本誌の扉に「国際心は愛国心の拡大なり」という副題が付されている。また、新渡戸は講演中「ベーツさんが、神戸にこんな立派な学校を経営し」、この講演に先立って、新渡戸は聖徳太子の一七条憲法に「ベーツ院長が読まれた聖句に似た「和」を以て貴しとする。の句がある。∴その中に平和が含まれている」と指摘している。なお、ベーツが読んだ聖句を特定化できていない（七七―七八頁）。

(18) さしあたり石川明人『キリスト教と戦争―「愛と平和」を説きつつ戦う論理』（中公新書、二〇一六）の第四章「初期キリスト教は平和主義だったのか」を参照のこと。また、「コンスタンチンは、基督教会を殺した」（岡山発言）と指摘した内村の「信仰は、そのコンスタンチヌス体制を突き抜けてパウロの時代の信仰にまでさかのぼり、初代のキリスト教に戻った」（富岡発言。岡山英雄・富岡幸一郎前掲書、二〇―二二）からこそ、「戦争絶対的廃止論」を説くことができたと言える。なお、富岡はこの「キリスト教公認」（三二―三三年）以降「キリスト教はユダヤ・ヘブライズム的なものから、ギリシャ・ヘレニズム的要素へと大きくカーブを切り、それにより「キリスト再来説を「猶太人の迷妄」（海老名弾正の言葉）」として退けた」（七六頁）という。

(19) 新渡戸よれば「真の国際的協調」は「条約下に各国が協力するということより以上」のもので、「精神の問題、真実誠実の問題でなければならぬ」ものであり、真の平和は「戦争より

もさらに非人道的」な「力によって保たれる平和」に反対し、さらには「戦いなきは平和にあらず」(二二二)とさえ主張した。もつともこの「消極的平和論」つまり「現代の平和論」者は「内村鑑三とまったく異なる」と考える福田恆存の思想については富岡前掲書(三一〜三八頁)を参照のこと。なお、「戦いなきは平和にあらず」との文言を佐藤は「ライブニッツ」(二二三頁)としているが、おそらくスピノザのことであろう(「実に平和とは戦争の欠如ではなくて、精神の力から生ずる徳だからである。…ともあれその平和が臣民の無気力の結果にすぎない国家、そしてその臣民があたかも獣のように導かれてただ隷属することしか知らない国家は、曠野と呼ばれてしかるべきである」(畑中尚志訳『スピノザ国家論』岩波文庫、一九九五、五九頁)。…曠野と呼ばれてしかるべきである」(畑中尚志訳『スピノザ国家論』岩波文庫、一九九五、五九頁)。

(20) 国際連盟を「絶対的平和主義」と位置づける新渡戸は未だ「相対的平和主義者」であり、「戦争絶対的廃止論」者内村とは明らかに異なる。ところで、新渡戸はこの国際連盟について「日本ではほとんど批判を受けてこなかった」(四九七頁)と書いたが、その例外的な人物の一人が福田徳三である。この点については、例えば福田の「エホバとカイザー」、「エホバとカイザー」とよりの解放」を参照のこと。彼は後者において内村鑑三の「キリスト再臨問題」と「国際連盟成立」との関係に注目している(『暗雲録』武藤秀太郎編集、『福田徳三著作集』第一六巻、信山社、二〇一六、一〇三頁)。

(21) 新渡戸稲造「日本における国際連盟運動」『新渡戸稲造全集』第二一巻(再版)、一九八六、四九七〜〇七頁。この論文には「一九二五年四月九日ジュネーヴ」と書かれていることから考えると、その趣旨が、一九二四年一月から翌年二月二日までの一時帰国に際して新渡戸が行った講演会で語られたと思われる。日本滞在時の講演会の一覧・聴衆者対象・人数等が「講演会一覧表」として収められている(五〇八〜一八頁)。それによれば、関西学院(七五〇人)での講演は二五年一月二九日に開催され、同日、他に神戸高等商業学校(一千人)と神戸経済連合会(六〇人)でも開催されている(五一二頁)。

(22) 高木八尺「新渡戸先生と太平洋問題調査会」『新渡戸稲造全集』別巻（再版）、一九八二、四六一頁。
 なお、この文言は、京都で開催された第三回太平洋問題調査会の会議での開会の辞であり、邦訳は
 新渡戸編『太平洋問題』（八一～九二頁）に納められている。また、「天の永遠の世界から地上の世
 界を見ていた」内村に対して、バルトは「地上の世界から天の世界を見ていた」（岡山の発言、岡
 山英雄・富岡幸一郎前掲書、五七頁）とすれば、新渡戸は、「天の永遠の世界から、地上の世界を『協
 調』により一致（一致）へと向かった」と言えよう。

(23) 一八九二年、関西学院の基督教青年会に入会し、九五年三月頃関西学院普通学部中途退学した浅田
 彦一（一八七五～一九三六）は、一九〇九年一月『太陽』の編集権兼発行人となり、浮田和民のも
 とで「政治外交欄」を担当し、一七年に主筆となった。浅田の略歴・『太陽』執筆目録等について
 は、井上琢智「人びと 四 浅田彦一（空花、江村）」（『関西学院史紀要』第八号、二〇〇二）を
 参照のこと。なお、本稿に関わる浅田の『太陽』掲載記事には以下のものがある。「日露関係の平
 凡化」（第一六卷第一号、一九一〇）、「平和乎、戦争乎」（第一七卷第一号、一九一一）、「高
 価なる武装平和」（第一七卷第一三三号、一九一一）、「開戦前後の外交の成敗」（第二一巻第一号、
 一九一五）、「戦争と外交」（第二二巻第一号、一九一六）、「時事小観（日露の外交）」（第二二巻第
 二号、一九一六）、「講話乎恒久戦乎」（第二三巻第一号、一九一七）、「国際連盟問題」（第二五巻第
 一号、一九一九）、「講和会議の前景気」（第二五巻第二号、一九一九）、「粗製濫造の国際連盟」（第
 二五巻第三号、一九一九）、「講和会議の暗黒面」（第二五巻第五号、一九一九）、「奇怪なる巴里会
 議の産児」（第二六巻第七号、一九二〇）、「独逸が調印するまで」（第二六巻第七号、一九二〇）、「平
 和条約の成立」（第二六巻第七号、一九二〇）、「国際連盟の発動」（第二六巻第七号、一九二〇）、「死
 の宣言」を意味する対墮講和条約」（第二六巻第七号、一九二〇）、「太平洋会議と日本」（第二七巻
 第一〇号、一九二二）、「時局の印象（亜米利加禍）」（第二七巻第一二二号、一九二二）、「海軍制限案
 歓迎」（第二七巻第一四号、一九二二）、「海軍協定問題の停頓」（第二八巻第一号、一九二二）。また、

神崎驥一は「太平洋關係調査會議に於ける移民問題の考察」を『太陽』第三二卷第四号（一九二六）に投稿している。なお、関西学院関係者である稲垣足穂、今東光、竹友藻風、永井柳太郎、山田耕柝も『太陽』に投稿している。

(24) 石井知章「浮田和民と『倫理的帝國主義』論」『アジア太平洋討究』No.一九、二〇一三、九二頁。

(25) その内容の一部と反響とが雑誌『太陽』（第一〇卷第一四号）の「評論の評論」欄で紹介されている。

(26) 柴田卓弘「反骨の言論人 浮田和民―早稲田大学草創期の巨人―」東久留米稲門会第九回総会

（二〇一三年三月三〇日開催）での講演録。なお、柴田卓弘『浮田和民物語―自由主義者の奇跡―』（日本評論社、二〇一五）とくに第三章二「反骨の言論人として」を参照のこと。

(27) 最後の一つが浮田の「俘虜留學論」で、当時一般に理解された「武士道」を「欧米の考えにもとづき」、その行き過ぎを浮田は批判した（柴田前掲講演、六頁）。なお、柴田は浮田を「人權の擁護者」として評価する（四〇五頁）が、浮田の差別思想については、主として「排日移民法」を扱った『日米非戦論』（一九二五）を参照のこと。そこで、浮田は「人類は或る点に於て平等であるが、人種に於ては確かに不平等である。之を前提として移民問題の解決を望むは無理であろう。人種又は民族として殆ど差別しがたき朝鮮人民に対してすら吾々は未だ同胞として公平な待遇をなし得てゐないではないか。人種平等論は愚論である。これは劣等人種を基準として凡て他の人種をそれに同化せしめんとする説であるから優等民族は必ず反対する。又た反対するのが当然である。吾々は個人としても国民としても、優等人種を以て自ら任じ、又た優等人種として成功しつゝ、あるのである」（一二三四頁）と主張し、さらに「人口過多の場合には先ず劣等人口を減少する方法を講じなければならぬ。之を世界的に云えへば劣等民族を絶滅し優等民族を生存せしむるが最も道理に適つた事である。その絶滅とは単にその民族を繁殖しない様にする事である。：故に私の意見では今日の所謂人種問題は人口激増世界縮小の結果であつて人種的偏僻が其の原因ではないと思ふ。人種の相違がなくとも、人間としての素質が不平等であれば、その劣等なる者を減滅さする方針に出づるこ

とは文明の主義として承認しなければならぬ真理である。現に米国の諸州に於て発狂者、瘋癲、白痴、暴酒家若くは悪遺伝病者の結婚若くは産児を禁止する法律を制定して居るのは其の目的に出でたものである。人種に相違があり、又た其間に優劣があるとすれば、いかに人種平等論を唱えても、事實が否定するから、無効の論たるを免がれない」とまで指摘している（一一八―一九頁）。ここには「人類平等」を「或点」と限定的に前提とし、「民族」、さらには「個人」には「不平等」「優劣」が「現実」にある限り、「人種平等論」は「理想主義」（六八頁）に過ぎず、「実際問題」としては「文明の主義として承認する」のが「真理」であるしている。なお、浮田は、アメリカにおける日本人排斥運動の背景にある日本人差別（黄禍論）を日本人は批判するが（例えば、一九一九年二月七日、日本は国際連盟規約委員会で人種的差別待遇撤廃を提案した）、その日本は朝鮮人を差別しているという矛盾を犯していると批判している。これは「反骨の言論人」浮田の一つの表れであろう。

(28) 「世界国家と平和運動」賀川記念館 (<http://core100net/works/works04.html>)。

(29) 賀川豊彦「エレミヤ哀歌に学ぶ」(月刊誌『雲の柱』賀川豊彦全集』第二四卷、キリスト教新聞社、一九六四、三九九―四〇二頁)。文中の「世界の理想は神中心の神の国の組織である」という文言に、内田の影響を読みとることは不可能ではないであろう。

(30) 川島幸夫「賀川利彦と太平洋戦争」賀川豊彦記念松沢資料館編『日本キリスト教史における賀川豊彦―その思想と実践』(新教出版社、二〇一一)。二〇〇―〇一頁。川島は、賀川の転向の理由を、一、天皇への崇敬、二、太平洋戦争における日本の立場を《弱者の立場》や《小さな者への愛》、三、賀川の社会的地位の変化に求めている(二〇四―〇七頁)。また、戦後の賀川による戦争責任の告白と謝罪についても、川島幸彦前掲書、二〇九―一二頁を参照のこと。

(31) 『関西学院 高等商業学部二十年史』一九三二、一〇九頁。このような文言が書かれたのは、本『二十年史』の編集責任者が関西学院の恒久平和運動を支えた神崎驥一であったからであろう。

(32) William Jennings Bryan (1860-1925) は、平和主義者であるとともに敬虔な長老教会派の信者、禁

酒法支持者であるとともに、ダーウィニズムの反対者でもあり、また、一九世紀後半と二〇世紀前半のアメリカのポピュリズム(人民主義)における最も著名なリーダーの一人であった。彼は、「Great Commoner」と呼ばれ、一般人の正義と良識に対し、絶対的な信頼を寄せていた(『岩波西洋人名大辞典』二〇一三、二三八一頁)。

(33) 井上琢智「文部行政と関西学院」(『関西学院大学史紀要』三号、一九九三年六月)および、田中敏弘「明治の天皇制国家主義と関西学院―文部省訓令一二号と『認定』問題をめぐって―」(『関西学院キリスト教教育研究室報告』1、『関西学院の歴史とキリスト教教育』一九七二(再録『建学の精神考 第二集』関西学院キリスト教主義教育研究室、一九九五)を参照のこと。

(34) カリキュラムの編成過程については、井上琢智「文部行政と関西学院普通科」(『関西学院大学史紀要』四号、一九九四年一〇月)を参照のこと。